

京都大学	博士(文学)	氏名	河原由雄
論文題目	当麻曼荼羅の研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、奈良時代に中国から請来された、あるいは制作された著名な浄土曼荼羅である当麻曼荼羅にまつわる諸問題を論じている。すなわち、当麻曼荼羅の図相の成立に至る経緯、未だ謎の多いこの曼荼羅の図相の想定、さらには転写本や縁起文などの展開といった問題などを論じ、この曼荼羅の美術史上の位置づけを明瞭にすることを試みている。</p> <p>冒頭の「序と梗概」に続く本文は、全体で六部から構成され、第一部「東亜に於ける観経変相」、第二部「絹絵本の諸問題」、第三部「浄土三曼荼羅の諸問題」、第四部「当麻曼荼羅にみる九品来迎図」、第五部「当麻曼荼羅図の諸本」、第六部「当麻曼荼羅縁起」の成立とその種々相からなっている。</p> <p>以下、各章ごとの内容の要旨を記す。</p> <p>第一部は、「敦煌浄土変相の成立と展開―壁画中心―」という一章からなる。ここでは、観経変相図が数多く現れてくる敦煌壁画における観経変相図を、図相を詳細に分析し、初唐から宋初に至る時期の展開の様相を論述している。論者の想定によれば、まずA(敦煌文物研究所番号)三三二洞東壁の阿弥陀浄土図のような阿弥陀三尊を中心とする簡素な浄土図が次第に荘嚴の度を加え、A二二〇洞南壁のような宮殿楼閣を架し、舞楽会や蓮池会を備えた複雑な中部図相を表すようになるとしている。それとともに、A四三一洞のような独立的な序品図や十六観図がそれに付加され外縁部を形成することとなり、これらを包括したものとしてA二一七洞北壁の如く完備した観経変相図が出現したとしている。このA二一七洞の観経変相図は、当麻曼荼羅の諸形式を備えたもので、中国に於ける善導系観経変相図の発展段階を最もよく示すものとした。</p> <p>第二部も「敦煌絹絵観経変相図の復元」という一章からなるもので、論者が詳細に分析し図相を確認したエルミタージュ美術館や、大英博物館(ロンドン本)、ギメ美術館に所蔵される敦煌伝来の絹絵観経変相図断片の研究を通して、当麻曼荼羅等の下縁に描かれる九品来迎図について考察を加えている。論者は、エルミタージュ美術館本の断片が、九品来迎図の一部と判明し、さらにこれは大英博物館本の観経変相図の一部に当たると推測した。そして、これらの図は、当麻曼荼羅のプロタイプを考える上で重要な観点を与えてくれることも想定した。すなわち、ロンドン本などは、通例の当麻曼荼羅の序分義には見当たらない阿闍世太子の生前の宿怨を描く「未生怨因縁図」を配置していること、さらにこの図が観経序分義の阿闍世太子の悪行をひき起こ</p>			

す前提が分かる様に案配されていることなどから、これらの図が中国文学史でいう「変文」を背景に絵解性格を有し、成立していることが想定できるとした。いずれにしても、九品来迎などに関しては、各品様々なモチーフを付置した観経変相図が陸続として、日本に舶載され、日本で九品来迎図の中で再構築されていったことが想定されるとした。

第三部も「日本に於ける浄土三曼荼羅の成立と中国観経変相史」という一章からなるもので、当麻曼荼羅を始めとするいわゆる日本浄土三曼荼羅のうち、もっとも成立が早いとみられる奈良市元興寺（極楽坊）に関わる智光曼荼羅についてその図相の特色と感得伝説との関連を主に考察し、当麻曼荼羅研究の一助としようとする試みがなされている。ただし、智光曼荼羅は原本が失われていることもあって、この考察では智光曼荼羅原本を写したとみられる『覚禅抄』所収図や鎌倉時代に造られた大型厨子板絵本などの関連遺品からの分析のみならず、制作に纏わる説話や伝説の分析も合わせ行い、原本図相の推測を行っている。結論としていえば、智光曼荼羅の原本は、米国フリア美術館にある中国・南響堂山石窟請来の石彫阿弥陀浄土図に近い図相を推測している。本尊の前の蓮池には浄土往生の相を上中下に分けた三輩生が生まれていることなどから、本図が無量寿経変相図であることを知り得ると同時に、本尊の印相も右手を挙げ左手を膝上に安んじる「通仏印」に表されているものであり、智光感得の原本とは、通仏印を結ぶ阿弥陀像を中心とした古渡りの簡素な浄土図で、陸続と舶載せられた唐朝浄土図の諸形式を取り入れ、あるいは図相をさらに改めて完成したものと推測している。

第四部も「当麻曼荼羅下縁部九品来迎図像の形成」という一章からなるもので、ここでは当麻曼荼羅の大きな特色であるものの、原本からはすでに欠失してしまった、下縁部の九品来迎の図像形成の問題を取り扱っている。論者が特に注目したのが、後世の当麻曼荼羅模本類に顕著に認められる九品来迎図に描かれる聖衆の坐像あるいは立像の違いについてである。これを検討することで、坐・立の別についての意味と見通しを述べ、ついで日中の観経変相史に占める代表的諸本を通観し、当麻曼荼羅下縁部図像のプロトタイプを究明しようとする試みを行っている。検討の結果、当麻曼荼羅下縁部図像のプロトタイプについては、

- ①上品相当の各図における阿弥陀聖衆の姿勢については坐像来迎が本来の姿であり、かつ中尊阿弥陀仏の印相は七―八世紀の阿弥陀に共通な説法印とみとめられること。
- ②九品各品の画面方式については、敦煌画は概ね九品九図に区画されているが、一図中に来迎と還来迎を規則的に併せ図し、一図一図としての構図上の簡潔性が強いこと。
- ③九品各図の構図はあまり観経所説に拘泥しない融通無碍な図を描くこと。

などの特色を上げ、図像の概要を想定し、さらにより詳細な図像の有様を上品上生より下品下生に至るまで九品に分けて推測を行っている。

第五部「当麻曼荼羅図の諸本」は、第一章「当麻曼荼羅原本の現状」、第二章「綴織

原本とその図様」、第三章「当麻寺に於ける曼荼羅諸本」の三章からなる。第一章では、総体に朽損し、とりわけ過去二度にわたる大修覆のため、いま残る当初の綴錦の部分は全体の約4割ほどの状態にある当麻曼荼羅原本の現状をまず詳細に記述している。第二章では、当麻曼荼羅原本の図相をまず確認していく。論者は本曼荼羅を浄土三部経の一つ、『観無量寿経』を所以とし、唐の浄土教家、善導大師（613—681）の解釈になる『観無量寿仏教疏』（『観経四帖疏』と略称されるもので、玄分義・序分義・定善義・散善義の四帖からなる）に正しく基づく観経曼荼羅図と定義するが、本章の前半の大部分は、この定義を基に図相を詳細に分析している。続いて論者は、本曼荼羅の成立に言及する『建久御巡礼記』ほかの史料に検討を加え、銘文帯にあったという天平宝字七年（763）の年紀や発願者の問題を論じ、制作の契機としては藤原宇比良古の一周忌の可能性などを指摘している。これに続き、論者は本曼荼羅の修理や転写の歴史について史料を分析して紹介している。本章の最後では、本曼荼羅の成立の背景を再考し、本曼荼羅と敦煌壁画A一四八洞（776年銘）など、中国盛唐期の観経変相図との親近性を指摘するとともに、楼阁風宮殿表現の分析などから、本曼荼羅の図相・様式とも盛唐乃至は天平時代の特色が明らかなものとして強調している。なお、制作地については、中国及び日本説を紹介しているが、決定は行わず、また天平宝字七年の年紀についても、発願の時期を示すか、完成の時期を表すか、あるいは施入時期を示すかは現時点では不明としている。第三章は、当麻曼荼羅原本を所蔵する当麻寺及び関係寺院に所在する当麻曼荼羅の転写本について解説を加えたものである。第一節は、室町時代の転写本として名高い当麻寺所蔵の文亀本を、第二節では同じく当麻寺が所蔵する貞享本を、第三節では文亀本の転写本とみられる奥院所蔵本を、第四節では十四世紀初頭頃に作られたとみられる中之坊本を紹介している。いずれの節も、当麻曼荼羅原本の図相等の復元に際し有益な情報を提供してくれる各本の現状を簡明に紹介し、制作時期などの推定を行っている。

第六部は、天平宝字七年に中将姫が蓮糸でもって織りなしたとする当麻曼荼羅原本の織成伝説を描いた、神奈川・光明寺の「当麻曼荼羅縁起絵巻」に関する考察を行ったもので、第一章「縁起諸本中に於ける光明寺本の位置」、第二章「光明寺本「当麻曼荼羅縁起」の構成と内容」、第三章「光明寺本「当麻曼荼羅縁起」の絵筆者と発願者をめぐる諸問題」の三章からなっている。第一章では、当麻曼荼羅縁起を記す諸本と比較して、光明寺本「当麻曼荼羅縁起」の位置づけを試みている。ここでは、諸縁起を詳細に分析して、「光明寺本」が建長五年（1253）の「仁和寺本」と弘長二年（1262）の「禅林寺本」の間の時期に成立したことを推定し、また「光明寺本」と「仁和寺本」との親近性も明らかにした。第二章では、まず上下二巻からなる光明寺本「当麻曼荼羅縁起」の構成と内容が詳細に分析されている。これは、この絵巻が後世の改装によって改変された所があり、当初の姿を復元するためには、本絵巻の模本なども活用して絵巻を再構成する必要があるため、論者はここで構成の試案を提示してい

る。第三章では、「光明寺本」絵巻の絵の筆者と発願者を検討している。まず「光明寺本」の絵の筆者については、南都絵師との関連に注目しながらも、その作風とは異なるもので、さらなる検討を今後加える必要があるとした。一方、発願者については、この「光明寺本」が作り絵本位の絵巻であること、詞書きのテキストが京都系縁起であること、女性信者の参画が予想されることなどを考慮し、曼荼羅堂厨子銘の結縁者名といったものを手掛かりとして検討を加えている。これにより、発願者として鎌倉中期の女院の一人である承明門院源在子の可能性を推測し、承明門院とも関わりの深い西山派の僧侶の本絵巻制作への関与の可能性を示唆した。さらに、承明門院が発願者とすれば、その没年から「光明寺本」の制作の下限が、「禅林寺本」よりも遡る正嘉元年（1257）とすることができる可能性を示唆した。

(論文審査の結果の要旨)

当麻曼荼羅は、わが国の浄土変相図の中で、もっとも著名なものの一つである。奈良時代に中国から請来された、あるいは奈良時代に日本で制作された原本が、奈良県当麻寺に伝わっている。本論文は、この当麻曼荼羅について、未だ謎の多い図相の想定、当麻曼荼羅の図相の成立に至る展開の様相、さらには転写本や縁起文の展開といった諸問題を論じ、この曼荼羅の美術史上の位置づけを明瞭にすることを試みたものである。

計六部、十章の本文からなる本論文の検討を通して得られた主要な成果としては、以下の四点を挙げることができよう。第一点は、当麻曼荼羅のような浄土変相図が成立する中国唐代において、観経変相図の図相展開の筋道を明瞭に提示したことである(第一部)。ここでは、観経変相図が数多く現れてくる敦煌壁画における観経変相図を検討の対象とし、それらの図相を詳細に分析し、その展開の様相を明らかにしている。論者の想定によれば、まずA(敦煌文物研究所番号)三三二洞東壁の阿弥陀浄土図のような阿弥陀三尊を中心とする簡素な浄土図が次第に荘嚴の度を加え、A二二〇洞南壁のような宮殿楼閣を架し、舞楽会や蓮池会を備えた複雑な中部図相を表すようになり、それとともにA四三一洞のような独立的な序品図や十六観図がそれに付加され外縁部を形成することとなり、これらを包括したものとしてA二一七洞北壁の如く完備した観経変相図が出現したとしている。このA二一七洞の観経変相図は、当麻曼荼羅の諸形式を備えたもので、中国に於ける善導系観経変相図の発展段階を最もよく示すものであることにも言及を行っている。取り上げた各窟の壁画の制作時期などについては、近年の研究で多少揺らぎがみられるものの、唐代における観経変相図の展開に見通しを付けたことは、当麻曼荼羅の図相成立の図相変遷の道筋を明らかにしたものとして評価されよう。

第二点は、当初の図相が失われているところが多い当麻曼荼羅原本について、欠失等で図相が曖昧となっている部分の図相を想定し(第五部第一章、第二章)、また原本からすでに失われた下縁部の九品来迎図の図相の様相を推測する試み(第四部)を行ったことである。特に注目されるのが、下縁部の図相推測の問題である。当麻曼荼羅下縁部の九品来迎図は当麻曼荼羅の大きな特色であるものの、原本からはすでに欠失しており、後世の模本類には図相に相違が認められる。特に問題となるのが、当麻曼荼羅模本類に顕著に認められる九品来迎図に描かれる聖衆の、坐像あるいは立像の違いについてである。論者は、模本類を検討することで、坐・立の別についての意味を述べ、ついで日中の観経変相史に占める代表的諸本を通観し、当麻曼荼羅下縁部図像のプロトタイプを究明しようとした。検討の結果、当麻曼荼羅下縁部図像のプロトタイプについて、上品相当の各図における阿弥陀聖衆の姿勢については坐像来迎が本来の姿であり、かつ中尊阿弥陀仏の印相は七世紀から八世紀の阿弥陀如来像に共通な説法印と認められることなどを明らかにした。当麻曼荼羅原本の図相復元の問題は、当

麻曼荼羅研究の根幹に関わる問題であり、これに関してきわめて重要な指摘をなしたことは高く評価される。

第三点は、当麻曼荼羅研究の一助としようとする試みの一つとして、いわゆる日本浄土三曼荼羅のうち、もっとも成立が早いとみられる智光曼荼羅についてその図相の特色と感得伝説などを考察し、原本が失われている智光曼荼羅の図相を推測したことである(第三部)。この考察によれば、智光曼荼羅の原本は、通仏印を結ぶ阿弥陀像を中心とした古渡りの簡素な浄土図とみなされるが、浄土変相図が陸続と舶載せられた日本の浄土教美術の対外受容の様相の一端を明らかにした点は甚だ興味深いものがある。

第四点は、当麻曼荼羅原本の織成伝説を描いた、神奈川・光明寺の「当麻曼荼羅縁起絵巻」の検討を通して、鎌倉時代における当麻曼荼羅縁起の流布の様相の一端を明らかにしたことである(第六部)。特に、発願者として鎌倉中期の女院の一人である承明門院源在子の可能性を推測し、承明門院とも関わりの深い西山派の僧侶の本絵巻制作への関与の可能性を示唆した点は注目される。

このように本論文は、随所に現在の当麻曼荼羅研究の基礎となる見解が提示されており、当麻曼荼羅研究の基本的な論文として評価される。しかしながら、最近になって提唱された当麻曼荼羅研究については言及がなされていない点などは、些か物足りなさが残された。ただ、現在の当麻曼荼羅研究の基礎となったものが、1960年代から90年代にかけて論者等が推し進めた研究であり、本論文はその主要な成果を改めて取り纏めたものと言える。ここで論じられた諸問題は、当麻曼荼羅研究の学史上きわめて大きな意味を持っており、先の問題などは論文としての価値を大きく損なうものでは無かろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2009年9月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。